

エレクトロニクスで社会に貢献する

ROHM



## 22 月を釣ろうとしたロー

(ソロモン諸島の昔ばなし)

昔ある南の島に、ローという少年がいました。

ローはまだ10歳でしたが、島の誰よりも釣りが上手でした。

そして、その島の人々は、あらゆる物に恵まれ、自分たちが世界で一番の幸せ者だと思っていました。  
しかし、島の人々は、月の光が他の島々も平等に照らしていたことが唯一の不満で、ローに言いました。

「ロー、名人のおまえがあの月を釣っておくれ。捕まえてこの島だけのものにしたいのだ。」

ローは、気が進みませんでしたが、一番大きな釣り竿と針、長い長い糸を用意して海岸で待ちました。

月が姿をあらわすと、ローは力一杯竿を振り、針は一直線に月に向かいました。

しかし、何度も試してもローが投げた針は月には届きません。

見物していた島の人々は、島一番の釣り名人にも捕まえさせない月にハラを立て、月に向かって泥を投げつけました。

月の光はその後も平等に降りそそいでいますが、月に黒い汚れのようなものがあるのは、

そのとき島の人々が投げつけた泥のせいだということです。

# 人の力が及ばない、遙かに遠い月でした。

## ローム君の新・博物日記

### 世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。  
おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れて  
いるいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

#### ●人類の月への想い。

「月を釣ろうとしたロー」は、オーストラリア大陸から少し赤道寄りにある、ソロモン諸島の昔ばなしです。昔から人類は、月の神秘に対して高い関心を寄せていて、月が登場する昔ばなしは数多くあります。しかし、この昔ばなしのように月を捕まえようとした話は世界的にも珍しいのだと。ローは、わずか10歳の少年でした。小さい者・弱い者が実はスゴイというのは、昔ばなしで好まれる形です。しかし、この優れた力を持った主人公ですら月を捕まえることはできなかったというところにこの昔ばなしのテーマがあります。それは、人間は、自然の力を独占も支配もできないということ。大自然の中で生きた人々が教えてくれる、大切なメッセージです。

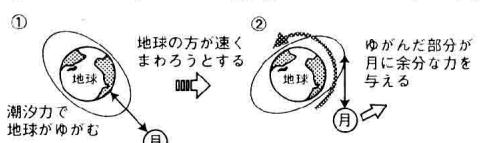
#### ●近くに想いて遠きもの、月。

天文感覚クイズです。月と地球を二つの円で紙に描いてみてください。ただし、二つの円の大きさと距離は実際の比率で。よろしいですか？それでは正解です。十円玉を一つ用意してください。十円玉を机においてそこから60センチ離れたところに、紙に穴を開けるパンチの丸い切れ端(直径約5ミリ)を置いてください。もうおわかりですね。十円玉が地球でパンチの切れ端が月なんです。いかがでしたか。これはだいたいの比率ですが、ほとんどの人が、月は思ったよりも地球から離れていると感じたのではないかでしょうか。距離にして約38万キロメートル。地球

の直径30個分は離れています。時には昔ばなしのように釣り竿と糸でも届きそうなほど身近に感じる月への道のりは、遙かまで続く道なのです。

#### ●月が、地球から離れていく。

月は毎年約3センチメートルづつ地球から離れているそうです。これは、月と地球との間に働く潮汐作用のため。月が地球の海の干潮に影響しているのは有名ですが、月の引力は海を盛り上げるだけではありません。ほんのわずかですが、地球の形も歪めてしまいます。そして、この地球の出っ張った部分が引っぱる力(摩擦力)は、月を遠ざけるように働くのです(下図)。ところで、逆に考えると、こういう推察はできるでしょうか？「この昔ばなしが出来た頃は、月が今よりもっと近くに見えていたので、昔の人は本気で月が釣れそうに思えた。」……いいえ、この推察は、成り立たないようです。だってそれは、何億年もの時を経てやっと実感できること。1年で3センチということは、10万年でやっと3キロメートル、それに対して月と地球は約38万キロも離れているのですから。とはいえ、夜間照明のない島の、澄んだ空気の上に浮かぶ月の美しさ。何とかして手に入れたくなるほど素晴らしいかったです。



昔ばなし監修／昔ばなし研究所 所長 小澤俊夫  
取材協力／大阪市立科学館 学芸員 渡部義弥